

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 17 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16676

研究課題名(和文)ポストヒューマンと心の制御をめぐる歴史 - 科学的心理学の大衆化と応用の表象文化論

研究課題名(英文)History of relationship between visual culture, and the application and popularization of psychology: a historical background of post-human and society of control

研究代表者

篠木 涼 (SHINOBI, RYO)

立命館大学・文学部・授業担当講師

研究者番号：00536831

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、現代のポスト・ヒューマン論や管理・コントロール社会論の観点から、20世紀半ばまでのアメリカの心理学とメディアの歴史を捉え直し、現在にまでいたる論点を明らかにした。また、19世紀に登場した科学的心理学という学問知と、社会や文化との関係性を検討するため、科学の応用、そして大衆化・普及をめぐる問題に着目した。人間の心身をめぐる同時代的な心理学知が、心理学者という特定分野の専門家と、その分野の非専門家と双方の間で、自己と他者をコントロールするのに役立つ知のようにみなされ、広がった状況を具体的な領域に即して分析した。

研究成果の概要(英文)：This study examined the history of American psychology and media in the early 20th century and connected the issues related to them with the results of current research on post-humanism and society of control. To interpret the relationship between psychology, a new scientific field that emerged in the late 19th century, and modern society and culture, this study concentrated on some psychologists who asserted its usefulness in assisting self-control and control over others in order to popularize psychology.

研究分野：視覚文化論

キーワード：視覚文化論 心理学史 コントロール社会 ポスト・ヒューマン メディア マス・コミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

20世紀末以降、コンピュータやインターネットに基づくデジタルメディアの普及とともに、情報に対する新たな管理・コントロールが登場し、そのあり方を捉えようとする動きとして管理・コントロール社会論が改めて探求されるようになってきた。

また、第二次世界大戦後の情報科学やサイバネティクス、生命科学や脳神経科学などの展開が、これまでの人間のあり方、そして「人間」という概念そのものを変化させつつあるという認識のもと、「人間」以後の世界の可能性を検討するポストヒューマン論と呼ばれる動向が現れてきた。

これらの動向は、20世紀後半以降の科学や技術による社会と文化への根本的な影響について、表象文化論、哲学、倫理学、社会学など多様な領域で検討を促してきた。

しかし、このようなポストヒューマン論や管理・コントロール社会論は、20世紀後半以降の情報科学と生命科学に焦点を当てる一方、双方と結びつく20世紀半ばまでの心理学の展開は十分に検討されてこなかった。

たとえば、ポスト・ヒューマン論の古典であるキャサリン・ヘイルズによる『How We Became Posthuman: Virtual Bodies in Cybernetics, Literature, and Informatics』(1999)では、第二次世界大戦以後の認知科学や情報科学、そしてその基礎となったメイシー会議やサイバネティクスの動向が取り上げられ、この動向を背景に生じてきた諸表象においてどのような主体が描かれてきたのかが批判的に検討される。ヘイルズがこれらの表象から行う脱身体化された主体のあり方への批判は説得的であり、その議論の有効性はいまだ失われていないように思われる。他方で、ヘイルズが批判的にとらえた主体の描かれ方の背景のひとつである認知心理学が、どのような心理学史的背景から登場してきたのかは検討されていない。つまり、どのように心なるものを捉えるのかという科学的探求の歴史と結び付けられていない。一般に、認知心理学は、20世紀半ばにおける行動主義心理学への批判とともに登場してきた。そして、行動主義心理学は、測定可能な反応に重視し、逆に身体性に着目する度合いが高いと考えられるが、このような心の捉え方を背景にした主体の表象はどのようなものであったのであろうか、そういったことにはふれられていない。

また、管理・コントロール社会論である北野圭介『制御と社会』(2014)は、20世紀後半以降の政治学、社会学、哲学などの諸言説を、コントロール=制御概念の使用のあり方によって通観する。コントロール=制御という観点から、諸領域の言説に新たな読みを提示しようとする試みは啓発的である。とりわけ本研究にとって『制御と社会』が興味深かったのは、その議論の前半で20世紀半ばのデイヴィッド・イーストンによる行動論的政治

学が取り上げられていることである。コントロール=制御概念を現代の社会的状況に近づけようとするときに、行動主義とのつながりが示唆されているからである。だが、やはり本書の焦点はヘイルズと同様20世紀半ばから現代に至る流れを描き出すことにあり、行動主義を含む20世紀前半の心理学史への接続はおこなわれていない。後に見るように、行動主義を中心に20世紀前半の中心概念の一つがコントロールであったにもかかわらずである。

2. 研究の目的

以上のような研究状況を背景として、本研究課題の目的は、現代的な研究状況に結びつくような観点から、20世紀半ばまでのアメリカの心理学とメディアの歴史を捉え明らかにすることとなった。

3. 研究の方法

以上の目的の達成のために、現代のポスト・ヒューマン論と管理・コントロール論の理論的検討とともに、心理学をめぐる歴史研究という方法をとった。

ポスト・ヒューマン論の検討からは、人間をめぐる科学的知とそこから想定される主体のあり方の再検討の必要性が、管理・コントロール論の検討からは、管理・コントロールはどのようなことをすることと考えられたのかを具体的な文脈において明らかにすることの必要性が、歴史調査にあたっての観点として浮かび上がってきた。

心理学史として、先行研究によって心理学の応用や普及・大衆化に関わってきたとされてきた心理学者や実践者の言説を、研究論文だけではなく、一般書や雑誌新聞記事、書簡も含めた検討を行った。

このときに、現代的な主体のあり方や表象、文化や社会と、心理学という科学知との関わりを考えようとする際に、科学の応用、そして普及・大衆化をめぐる問題が、現代の理論的観点とは別に、もう一つの重要な観点となった。

19世紀後半に登場した「若い」科学であった心理学は、20世紀初頭に向け、大学と学問の世界でその地位を確立していこうとするなかで、大学を中心とした研究機関で行われる実験的理論的研究だけではなく、それらの研究が実験室の外における諸活動を説明したり、予測したり、制御したりすることに役立つ応用研究が可能であると主張していった。そして、応用可能性を主張していくときに、その対象として、他の心理学者や周辺領域の研究者だけでなく、その領域に対してまったくの非専門家に対してもその可能性を主張使用する普及・大衆化が試みられた。

心理学の普及・大衆化は、その応用可能性のみを対象としていたわけではなかった。19世紀末から20世紀初頭、心理学は科学としての地位を確立するために、それが生理学な

どの従来から存在するものとは異なる科学であるという科学の内部での差異、そして従来精神的なものを取り扱う知のひとつであった心霊主義とは異なって心理学は科学であるという外部との差異を主張していくことがあった。心理学という学知がいかなるものであるのか、科学の内部と外部に線を引ながら自身の営みを広く知らしめようとする普及・大衆化の実践があったのである。

このような応用と普及・大衆化の試みがなされるなかで、心をめぐる新たな科学としての心理学は、主体のあり方、主体に対するコントロールのあり方を提出していった。本研究はここに焦点を当てることになった。そして、普及・大衆化に焦点を当てるということから必然的に、同時代のメディア、ないしマス・コミュニケーション、これらにおいて流通する表象のあり方が問われることになった。

4. 研究成果

このような目的と観点から、以下のような研究成果を発表した。本研究の成果は、大きく、19世紀から20世紀半ばにかけての心理学の応用化と普及・大衆化を進行する状況をめぐる研究と、20世紀半ば以降の応用化と普及・大衆化が一定進行した中で、心理学が、同時代の表象メディアやマス・コミュニケーションともった関係性をめぐる研究とからなる。

第一に、20世紀初頭から半ばにかけて、米国において心理学が応用へと向かい、また応用可能性があるという認識を普及・大衆化させて行こうという動向から研究を行った。ここでは、国家や企業による制度、統治や管理と密接に結びつく一連の流れが明らかになった。

まず、法、産業、教育、芸術など広範な分野において応用心理学的研究を行い、一般向けの著作を発表した心理学者のヒューゴ・ミュンスターバークが、応用心理学的研究への端緒として行った裁判心理学をめぐる研究である。ミュンスターバークは、目撃証言などの裁判に関する心理学研究の応用可能性を、意図的に、法専門家ではなく、それ以外の公衆に向けて新聞や雑誌などのメディアを通じて発信したために、論争が生じた。本研究は、この論争を普及・大衆化に焦点をあてて明らかにした。これを研究論文「アメリカ初期裁判心理学におけるミュンスターバークとウィグモアの論争--大衆への訴えかけと専門家との関係から--」として刊行した。

ついで、19世紀末に登場した労働の科学的管理への産業心理学への応用と、その表象メディアとの関わりをめぐって、フランク・バンカー・ギルブレスとリリアン・モラー・ギルブレスのギルブレス夫妻による動作研究についての言説を考察した。科学的管理法の実践者であったフランク・ギルブレスと、

産業心理学者であったリリアン・ギルブレスとの夫婦は、共著で科学的管理法における動作研究の著作を執筆し、そのなかで運動を写す写真や映画などの表象メディアと、表象メディアから労働者の身体が動作を理解する心的活動の両方をつなぐものとして視覚化概念を用いていたことを明らかにした。ここから、研究論文「科学的管理法における視覚化概念--F・B・ギルブレスとL・M・ギルブレスの動作研究を中心に--」を刊行した。

さらに、19世紀末から20世紀初頭にかけて、心理学が自己と他者の制御を可能にする知としての位置を確立しようとしてきたことをめぐって、心理学者ジョセフ・ジャストロウの言説を検討した。ジャストロウは、精神的なものを魂として捉える同時代の心霊主義や疑似科学の活動に対して批判を行う一方、ラジオなどのメディアで心理学知を伝えるこの時期の普及・大衆化の代表である。ここでは、ジャストロウは、同時代のウィリアム・マクドゥーガルの社会心理学を受容することで、自身の心理学のなかでセルフ・コントロール概念を本格的に使用し始めたことを明らかにした。これを研究論文「大衆化する心理学における「セルフコントロール」の登場--ジョセフ・ジャストロウを中心に--」として刊行した。

そして、19世紀末から20世紀前半の長期に渡って、心理学の普及・大衆化と応用の中心にいた心理学者ジェームズ・マッキーン・キャッテルをめぐる研究を行った。19世紀末からアメリカにおける科学雑誌『サイエンス』『ポピュラー・サイエンス』の編集者となり、科学メディアを通じた科学の普及・大衆化を行うとともに、20世紀前半には同時代の中心的心理学者たちを集めた企業「サイコロジカル・コーポレーション」を設立し、心理学の応用を推し進めたのである。これについて研究報告「大衆化と応用のアメリカ心理学史

19世紀末から20世紀初頭を中心に」を行った。

また、20世紀前半から半ばにかけて、プロパガンダ、パブリック・リレーションズの理論家・コンサルタントとして活動したエドワード・バーネイズのパブリック・リレーションズの具体的な実践を検討した。バーネイズは、精神分析学の創始者ジグムント・フロイトの甥であり、自身の言説にフロイトの名前と理論を用いながら、精神分析学以外の同時代のアメリカ心理学とも関わっていた。ここでは、バーネイズの実践が、具体的な企業やメディアと関わりながらどのような進んで行われたのかを明らかにしようとした。これについて研究報告「時間のなかでの行動のコントロールとしてのパブリック・リレーションズ--エドワード・バーネイズの実践から--」を行った。

第二に、20世紀半ば以降を中心に、心理学が、応用と普及・大衆化のなかで表象メディアやマス・コミュニケーションともった様々

な関係のあり方から研究を行った。

まず、20世紀半ば、それまでアメリカ心理学における主潮流であった行動主義心理学とそれを核として登場した精神医学的動向である行動療法を対象として研究を行った。行動主義心理学と行動療法は、1970年代の管理・コントロール社会批判の高まりなか、スタンリー・キューブリック監督『時計じかけのオレンジ』が引き起こした論争で批判を浴びることとなった。行動主義心理学の代表者の一人であるB・F・スキナーや、行動療法の代表者であるジョセフ・ウォルピなどの言説を辿り、20世紀半ばの行動主義におけるコントロール概念を明確にしなが、その実践における写真や映画などの表象メディアとの関わりを明らかにした。これを研究論文『時計じかけのオレンジ』によって引き起こされた行動主義をめぐる「イメージ」への影響

1960 70年代における行動主義心理学と行動療法への批判を中心に」として刊行した。

ついで、20世紀後半人文学諸領域の「空間論的展開」における「認知地図」概念を心理学史と結びつける研究を行った。「認知地図」は、批評家・思想家のフレドリック・ジェイムソンが、「ポストモダニズム」を論ずるなか、都市計画家のケヴィン・リンチを参照して用い、思想や文学の分野でもしばしば使われてきた。しかし、この動向においては、「認知」という明確に心理学的意味合いをもつ概念にもかかわらず、心理学史との結びつきは考えられてこなかった。本研究では、「認知地図」概念を提示し印象づけた行動主義心理学の代表者の一人であるエドワード・トールマンの議論を検討し、ジェイムソンの議論との比較を行った。研究報告「都市映画論の分析枠組みとしての空間論的転回と認知地図論」「戦後大阪映画の認知地図、盛り場の遊歩者」のなかでその成果を発表した。

さらに、20世紀半ば、太平洋戦争直前にアメリカに渡り戦後帰国し、日本における代表的な心理学者の一人となった南博の諸言説を対象に、アメリカ心理学と同時代の日本の言説状況との関係を研究した。20世紀視覚分化と心理学の関係を背景に、翻訳や編集などを行いプロデューサー的な活動を行うことで、日本における大衆文化やメディアをめぐる研究に先鞭をつけた心理学者として南博を位置づける研究を行った。これについて研究報告「The Historical Relationship Between Visual Culture and Psychology: Visuality, Popularization and Communication」を行った。そして、情報理論やサイバネティクスが受容されつつある戦後日本において、ポール・ラザールフェルド、ハロルド・ラスウェル、チャールズ・モリスら同時代の社会心理学者、社会学者、記号論者・哲学者の議論を紹介され、マス・コミュニケーション研究の流れが生じてくる状況を研究した。ここでは、20世紀後半の

日本のマス・コミュニケーション研究における基本概念となる「送り手」「受け手」が、南博による訳語と彼を含む思想の科学研学会の状況から登場してきた可能性を明らかにした。これを研究論文「送り手」「受け手」の誕生：南博の社会心理学と戦後日本におけるマス・コミュニケーション研究成立の一側面」として刊行した。

以上、本研究は、現代のポスト・ヒューマン論と管理・コントロール社会論の観点を手掛かりに、心理学史と視覚文化、表象文化論が交差する歴史的な主題を探究し、心理学という科学と文化・社会との関係性の点から重要であるにもかかわらず従来十分に扱われてこなかった対象を明らかにした。科学と文化・社会との相互作用のただなかで生きるわれわれの主体のあり方を考え直すための歴史的参照点を築こうという方向性にしたいが、本研究で行った作業と成果とをさらに先に進めていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

篠木涼「送り手」「受け手」の誕生：南博の社会心理学と戦後日本におけるマス・コミュニケーション研究成立の一側面」、立命館大学人間科学研究所編『立命館人間科学研究』37巻、2018年、pp.1-16。(査読有)

篠木涼「時計じかけのオレンジ」によって引き起こされた行動主義をめぐる「イメージ」への影響 1960 70年代における行動主義心理学と行動療法への批判を中心に」、立命館大学人間科学研究所編『立命館人間科学研究』35巻、2017年、pp.49-65。(査読有)

篠木涼「科学的管理法における視覚化概念 --F・B・ギルプレスとL・M・ギルプレスの動作研究を中心に--」、立命館大学生存学研究センター編『生存学研究センター報告』26巻、2016年、pp.55-75。(査読無)

篠木涼「アメリカ初期裁判心理学におけるミュンスターバーグとウィグモアの論争 --大衆への訴えかけと専門家との関係から--」、立命館大学人間科学研究所編『立命館人間科学研究』33巻、2016年、pp.15-27。(査読有)

篠木涼「大衆化する心理学における「セルフコントロール」の登場 ジョセフ・ジャストロウを中心に」、立命館大学人間科学研究所編『立命館人間科学研究』32巻、2015年、pp.35-53。(査読有)

〔学会発表〕(計 6 件)

篠木涼「戦後大阪映画の認知地図、盛り場の遊歩者」、「食べて飲む営みと場の「多機能性」からみた大阪論 21世紀的新盛り場論」研究会、2017年

篠木涼「都市映画論の分析枠組みとしての

空間論的転回と認知地図論」, 医学史研究会、
2017年

篠木涼「時間のなかでの行動のコントロールとしてのパブリック・リレーションズ エドワード・バーネイズの実践から」, 規範×秩序研究会研究合宿、2017年

Ryo Shinogi「The Historical Relationship Between Visual Culture and Psychology: Visuality, Popularization and Communication」, Department of East Asian Studies, McGill University、2016年

篠木涼「大衆化と応用のアメリカ心理学史 19世紀末から20世紀初頭を中心に」, 日米社会学史茶話会、2015年

篠木涼「反応とコントロールの視覚文化論 - 1960-70年代における行動主義心理学・行動療法におけるイメージについて」, 日本映像学会、2015年

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

篠木 涼 (SHINOGI, Ryo)

立命館大学・文学部・授業担当講師

研究者番号：00536831